

序言

いま、「人文学」は危機を迎えている、という。そして、「人文学の危機 (crisis of the humanities)」は、日本や東アジアのみならず、欧米においても盛んに叫ばれており、学問世界の現状と未来を憂えるキャッチフレーズのようにもなっている。

例えばアメリカでは、二〇一三年にハーバード大学が、「大学入学時に人文学を専攻することを希望していた学生の五七％が最終的には他学部を選ぶ」という「人文学の敗北」状況をレポートし (*The Teaching of the Arts and Humanities at Harvard College: Mapping the Future*)⁽¹⁾、一方アメリカ芸術科学アカデミー (American Academy of Arts and Sciences) は人文学・社会科学が果たすべき教育目的として「1、二十一世紀の民主主義を成功と繁栄に導くための知識、技能、理解を養う。2、革新的で競争力のある強力な社会を育成する。3、世界をつなぐリーダーシップを国民に培う」ことをあげ、人文・社会科学を危機から救い出すべく、未来への戦略的ビジョンを提言している (*The Heart of the Matter: The Humanities and Social Sciences. For a Vibrant, Competitive, and*

Secure Nation)。そして日本でもまた、人文社会科学系の大学のあり方を見直すべきだという発言が昨今続いている。

しかしそれでは改めて「人文学」とは何か、と問うとき、その答えを明確に示すことはできるであろうか。「人文学」ということばと概念は、少なくとも日本および東アジアにおいては近代以降に用いられるようになった歴史の浅いものである。例えば、日本の大学の学部として「人文学部」という名称が現れるのは戦後のことである（安酸敏真『人文学概論——新しい人文学の地平を求めて』。「人文学部」と「文学部」とにはいかなる違いがあるのか。「人文学」や「文学」と「社会科学」とは截然と分けられるものなのか、分けるべきものなのか。そもそも「人文学」とは、あるいは「文学」とは何であり、いま私たちはいかなる危機に面しているというのか。

もちろん、「人文」という語には、長い歴史がある。それは古く中国古典の『易経』にまでさかのぼり、そこには、「人文」という語が「天文」と対をなす概念として提示されている。すなわち、「天」の「文」に対して「人」の「文」があるということであり、「人文」とは、「天文」（自然現象）に対して、人間によって作り出される現象、人間が生み出すさまざまなものやこと、いわば文化の総体をさす語としてみるのである。

この『易経』の例が示すように、東アジアの文化史において、「文」は人間の営みに関わる最も重要な概念の一つであり、そしてそれは、現代における「人文学」や「文学」とイコールのものではなかったのである。

ところが、近代に至り、西洋文明と出会い、外来の「文学」あるいは「人文学」といったことばが日本の学術世界に入り込むのを引き替えに、それまでさまざまな知や文化を含む概念として存在していた「文」は急速に忘れ去られていった。替わって近代日本に新たに立ち現れた「文学」とは、中国文明や漢文学を排除し、差異化して、「日本」固有の、主として「かな」によって書かれた「文学」の系譜として意識的に創り出されてきたものである。そしてまた、その「日本」国民にとっての「文学」作品を抽象的に取り出して系譜化されたものでもある。しかしいま一般に「日本文学」といわれるものが、「日本」と、それに符合するカノンとして創造・想像されたものであることは決して広く了解されているとはいえない。にもかかわらず一方では、「人文学」や「文学」は現代では役に立たないものとみなされ、不急のものとして軽視されているという、この二重にも三重にも誤解が積み重なってしまっている現況こそが危機的状态なのではなからうか。我々はいまこそこの危機を改めて正視すべきではないか。そして、この危機を放置してしまうのではなく、むしろ画期として、「文学史」を書き替える時期に来ているのではないか。そしてその、新たな、真の、日本の知と文化の歴史、それは「文」という概念を柱としてこそ描き出すことが可能なのではないか。本

書の企画はこうした「危機感」と「希望」に端を発するものである。

それでは、日本において「文」とはいかなる意味をもち、いかなる役割を果たしてきたものであるか。

また、中国の「文」の世界はどのように日本の「文」を規定し、日本の「文」はそこからどのような展開を遂げたのか。

西洋の「Literature」と出会い、それによって「上書き」され、今へと続く「文学（ブンガク）」より以前、日本には果たしていかなる「文学」世界があったのか。

本書は、日本における「文」の世界を、古代から現代に至るさまざまな「変革」とともに改めて捉え直し、日本における「文」の概念史、すなわち「文」をめぐる知の歴史を、新たに「日本「文」学史」として構築し、発信することを試みるものである。東アジアの伝統的な「文」の概念は、現在、そして未来の「文」の世界といかに関わり、いかなる役割を担うのか、過去をふまえ、現在をとらえ、将来をも見通した展望を提起してみたい。

すなわち、狭義の「文学」「史学」「哲学」といった学問分野の枠組みをいったん取り払い、また、日本の現象を東アジアの視野にひらき、いま一度、日本の「文」がたどってきた道のりにスポットをあてることによって、この「文」という概念の意義あるいは可能性を再発見することができるのではないか。そしてそれは、いま世界に巻き起こっている「人文学の危

機」への一つの回答ともなるのではないか。「日本「文」学史」を考えることの有効性をひろく問いかけてみたい。これが本書の問題意識の原点である。

ここで、日本における「文」の由来と、前近代から近代に至るまでの変化をごく大まかに見渡しておくならば、日本において「文」は、先にあげた『易経』の説のような、中国の学術文化、漢字漢文文化の強い影響のもとに開発したものであることは疑いない。例えば日本最初の漢詩集『懐風藻』の序文には、いわゆる神武建国以来の「文」の展開が、「文」字、「文」献、「文」明、「文」人・「文」士、「文」学という、ひろく包括的なイデオロギーから捉えられ説明されている。当然これは中国の伝統的な考え方に基づくものである。

教育制度からみても、古代の大学寮においては、文章道・紀伝道が明経道や明法道などと並び、国家社会を支える学問として大きく位置づけられていた。しかし、十九世紀以降は西洋の教育制度の影響により、それまで経世・経国の主要な一基盤をなしていた「文」の概念と構造が解体され、近代の新たな大学・学校における各専門学科に振り分けられることになった。

同様の現象、変化は、書物の世界にもみとめられる。例えば、初唐に編纂された『芸文類聚』は、日本でも盛んに用いられた類書であるが、これは「文」を集め類別群分した百科事

典のごときものであり、いわば「文」による総合知を提示するものであった。しかし、そこに示された「文」による世界観、「文」と緊密に結びついた世界観は、現代の五十音引き、あるいはアルファベット順の百科事典には継承されず途絶えてしまった。

また、書物を整理し管理する目録についてみると、前近代の東アジアにおいては、「文」は中国伝統の「経、史、子、集」の四部分類を基本として把握することが共通に行われていたが、明治以後、欧米の学問体系が摂取される過程で、それまでの、人類の知を総合的に包括するテキストとしての「文」の概念は表舞台から降ろされることとなった。もう一点、注意したいのは、近代以降の図書目録において、「洋書」「国書」「漢籍」と言語による分類がなされるようになることである。これは、「和文」「漢文」「和漢文」による書物を蓄積してきた日本語の環境においては、学知の体系の基本を転換してしまふことに他ならない。例えば、「和文学（国文学／日本文学）」と「漢文学」を別の分類に切り分けているのは、実は不可能なことを、可能であるかのごとく行ってしまうのではないか。しかしそれでは、いま我々は何をどうすべきなのか。

学問の体系、知の枠組みというものは、固定したのではなく、つねに変化、展開が続いている。本書は、いたずらに伝統に固執するものではない。また、いたずらに現代を否定するものでもない。はじめにも述べたように、過去をふまえ、現在をみすえ、将来の方向を考

えていきたいのである。

本書は、「文」をめぐる最も大きな変化、転向は近代に生じたものであることを見据えつつ、近代以降、忘れ去られ、あるいは見捨てられてきた、漢文のみならず和文をも含むさまざまな「文」をすくい出し、改めて「文」と「文」を取り巻く世界の全体像に向き合ってみることによって、総合的かつ体系的に「文」の概念とその変遷を捉え、「日本「文」学史」として、日本の文化、社会史の新たな見取り図と今後へのビジョンを示すことを目指すものである。そのための有効な手引きとなるよう、本書は次の三冊によって構成する。

▽『日本「文」学史』A New History of Japanese “Literature”

第一冊 「文」の環境——「文学」以前

第二冊 「文」と人びと——継承と断絶

第三冊 「文」から「文学」へ——東アジアの文学を見直す

英文タイトルの“Literature”は、本書が追究しようとする「文」の含意を表すために新たに考え出した語である。すなわちヨーロッパにおいても、十八世紀までは、まさに東アジアの「文」に相当する、広く学問などの意をも含む“Letters”という語と概念があったもの

の、それはやがて、十九世紀以後に作られた新たな大学制度の枠組みとともに出現した狭義の「歴史学」「文学」(Literature)「哲学」といった各分野に分断されてしまった。したがって、「Literature」なる造語は、現在では「文学」(Literature)という語の陰に隠れ、もはや消滅してしまっただけのようである。「文」を言い表すのには、最適の訳語であると考えられる次第である。

まず、第一冊「文」の環境——「文学」以前は、「文学」以前、すなわち前近代における日本の「文」がいかなる環境のもとで、いかなる世界を形成していたかを、とくに「和漢／漢和」という点に重心を置いて描き出す。なお、冒頭には日本および中国の「文」の概念に関する総論を置き、本書の問題意識の所在を示している。全体は、各論の柱となる章に加え、具体的象徴的なトピックを扱うコラムより成る。

続く、第二冊「文」と人びと——継承と断絶」は、「文」と人びととの関わりを通史的にながめ、日本「文」学史を貫くもの(＝「継承」とともに、従来の歴史区分とは異なる角度から変化や転換(＝「断絶」)を照らし出していく。

そして、第三冊「文」から「文学」へ——東アジアの文学を見直す」は、西洋の概念や学問と出会い、「近代化」に向かった日本の「文」から「文学」への移行を、東アジア全体の問題として位置付け、現在に至る「文学」の意味を改めて問う。

以上三冊を通して、本書は、「文」をめぐる複数の観点から日本の「文」学史を捉え直し、

東アジアの「文」の古典世界や西洋の「人文学」との関係も含めて、日本の「文」の世界の実相と意義を追究するものとしたい。

本書が、幅広い読者の目に触れ、「日本「文」学史」の魅力を少しでも多く伝えることができるならば、編者にとっては望外の喜びである。

二〇一五年六月十九日

於ソウル・東京

Wiebke DENECKE

河野貴美子

sample

— もくじ —

序言

Wiebke DENECKE / 河野貴美子

(1)

第一章

「文」の概念を通して日本「文」学史をひらく

Wiebke DENECKE

1

いまなぜ「日本「文」学史」が必要なのか。「文学」と「文」の違いはどこにあるのか。「文学」の概念と枠組みを超えて「日本「文」学史」の構築を試みる本書の狙いとアプローチの方法を掲げる。「文学」の概念と枠組

第二章

古代中国における「文」の概念の展開

渡邊義浩

41

「日本「文」学史」を考える基点として、古代中国における「文」の概念についてみる。中国の社会「環境」において、「文」は儒教といかなる関係結びながら展開したのか、その動態をとらえる。

「文」の思想——和文に関する思想の萌芽をめぐって

日本において、「文」に対する意識はいかに芽生え、展開してきたのだろうか。ことに、和文が生成、展開していく貴族社会という「環境」における「文」への自覚と思考、思想の萌芽を追ってみる。

陣野英則

69

「文」と非「文」の世界

「文」の世界は、その一方にある「文」のない世界や「文」でない世界、いわば非「文」の世界とともに存在する。古代日本における「文」の世界の発生と意義を、非「文」の世界との関係から探る。

新川登亀男

97

- コラム1 木簡と「文」——市 大樹——143

モノとしての「文」——日本の書物の形態と内容の相関関係について

「文」を取り巻く環境の一事例として、「文」はいかなるモノに記されてきたのかということがらがある。「文」を載せるモノと、そこに内包される「文」との関係に注目し、モノとしての「文」について考える。

佐々木孝浩

147

- コラム2 絵と文字——黒田 智——175

目録と文庫

「文」と「文」に関わる情報を体系的に整理、提示するツールとしての目録、また書物を集積、管理する場としての文庫を取りあげ、その歴史的意義とともに現代におよぶ価値を改めて問う。

住吉朋彦

179

「文」とリテラシーの基礎

古代中世の日本において読み書きの能力、すなわちリテラシーは、どのような人びとがどのようにして習得したものであったのか。学問としての「文」について、教育、学習の場から考える。

河野貴美子

194

- コラム3 辞書・幼学書・類書・注釈——河野貴美子——230

- コラム4 大学寮——水口幹記——235

- コラム5 寺院の教育——僧尼志願者の「文」習得——勝浦令子——242

「文」と社会①——社会階層と「文」

日本の「文」は、それを取り巻く社会的環境といかに関わり行われたものであったのだろうか。古代日本における社会の各階層、集団と「文」との関係について考察する。

榎本淳一

248

「文」と社会②——女性と「文」

日本の「文」と社会ということを考えるとき、特筆すべきは「文」に関わる女性の存在である。女性にとって「文」とはいかなるものであったのか。女性の「文」と「漢」との関係を含めて再考する。

神野藤昭夫

271

●コラム6 ジェンダー理論と文——緑川真知子——295

経国の「文」①——文体が担う社会的機能

かつて日本の国家およびその政治環境において、「文」はいかなる役割を果たしたものであったのか。オフィシャルな場面に用いられた「文」の機能を、各種異なる文体の別を通して考える。

後藤昭雄

302

●コラム7 外交と文——高松寿夫——334

経国の「文」②——『典論』『論文』の受容と勅撰集の成立

日本初の勅撰集『凌雲集』の序は「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり（魏文帝）の一文を引く。「文章」と「経国」はいかに関わるものなのか。嵯峨朝に始まる勅撰集編纂の意図と実情を再検証する。

滝川幸司

338

文の場——「場」の変化と漢詩文・和歌・「記」

「文」は、行事や儀礼といったさまざまな特定の場においても重要な機能を果たすものであった。また、場の時代的推移とともに「文」が担った役割や意義にも変化がみえる。「文」と場の多様な相互関係を追う。

川尻秋生

378

●コラム8 儒教の場と「文」——水口幹記——405

●コラム9 仏教の場と「文」——平安京から長安へ——
——実恵の青龍寺あて書簡をめぐる——阿部龍一——411

●コラム10 神祇信仰の場と「文」——中臣祓の変容——伊藤 聡——424

第十一章

風流の「文」と詩歌

日本において、詩歌は何を素材として作成されてきたのか。また、いかなる詩歌が「風流の「文」」たるものとして扱われてきたのか。詩歌を定義する比喻を通して、詩歌の概念と詩歌創作への意識の形成をたどる。

後藤昭雄
431

第十二章

漢と和の「文」①——秀句の方法

漢と和の「文」は、いかなる修辭を用いて、いかなる表現世界を生み出していったのか。漢と和、漢詩と和歌のレトリックを相互に検討する。まずは、漢詩のレトリックについて、平安朝に盛行した句題詩における破題の表現方法をみる。

佐藤道生
465

第十二章

漢と和の「文」②——藤原定家に見る縁語的思考

和歌のレトリックについて、藤原定家の作を例としてみる。定家以前の和歌の表現世界の蓄積、漢詩文の手法や発想、それらが作者固有の自由な理想と想像力によって新たな和歌表現に紡ぎ出されていくさまをみる。

渡部泰明
475

●コラム11 兼作の人——堀川貴司——490

●コラム12 歌合と連歌——高松寿夫——494

●コラム13 詩歌合・聯句・和漢聯句——堀川貴司——498

●コラム14 「和」に描かれる「漢」の世界

——『うつほ物語』の学問と帝たち——陣野英則——502

●コラム15 「漢(文)」で「和」を描き出す

——和歌序の文体——Wiebke DENECKE——507

●コラム16 「和(歌)」で「漢(文)」を描き出す

——『日本書紀』『蒙求』に対する注釈的和歌の意義——Jennifer GUEST——514

あとがき

河野貴美子／Wiebke DENECKE——521

sample